

った。

次に四紙の書状についてみると、先と同様に四通をあげることが出来る。このうち一通に墨引、二通に墨引・上書の断片が貼合されたりしているが、いずれも本来は第一紙端裏であったと考えられる。ところで、「問注得意鈔」の第四紙は、字面を中にして折りたたまれ、この時には一番内側であったことが判明した。以上から四紙の書状は、第一紙を一番外側に、第四紙を一番内側にし、いずれも字面が中になるように重ねられて折りたたまれ、墨引・上書が加えられたことが明らかとなる。

また、五紙或はそれ以上に及ぶ書状において本紙に封が加えられているものを検討すると、四紙と同様に第一紙端裏に墨引或は墨引・上書を見出すことが出来た。事例は少いが、これらの書状も四紙の書状と同様に封が加えられたと考えられるのであり、聖人の長文の書状における封の加え方、或は料紙の折り方の一つの特徴を示していると思われる。

以上、主に二紙及び四紙の書状の折りたたみ方等について検討を加えた。ここで取上げた事例は、本紙に封が加えられているものであった。しかし、聖人の書状には懸紙を伴う場合や、料紙の表裏両面に本文を記してい

る事例も知られるのであり、後者の場合は聖人以外にはあまり知られていない。これらの検討は後日の課題としたい。

日蓮聖人の靈山往詣論についての一考察

都 守 基 一

近年、靈山往詣は、日蓮聖人の成仏論や、宗教的安心の問題との関連において重視されている。ここでは特に、聖人が自身の靈山往詣の願望や確信を述べておられる佐渡期の遺文にみられる説示と、前後の文脈の関連等について検討してみたい。

文永九年の『開目抄』、『宮木殿御返事』、および龍口法難の体験を述べられた『種種御振舞御書』には「靈山にまいりて」（六〇五頁）、「期_ス靈山浄土」（六二〇頁）、「日蓮今夜願切て靈山浄土へまいりて」（九六六頁）等、靈山往詣の願望、確信と共に、「生死を離_ル時_ニは必此重罪をけしはて、出離すべし（略）大難の来は、

過去の重罪の今生の護法に招出せるなるべし」(六〇二頁)、^三「値^二大賊^一、^三大毒^二易^一、^三宝珠^二可^レ思^一歎^二」(六一九頁)、^三「無量劫よりこのかた、をやこ(親子)のため、所領のために、命すてたる事は大地微塵よりもをほし。法華經のゆへにはいまだ一度もすてず(略)今夜頸切れへまかるなり。この數年が間願^二つる事^一これなり」(九六一頁)等と、過去無量劫より釈尊に背いて繰り返して来た生死に対する深い反省と、かかる宿罪の自覚に基づく殉難、滅罪の願望、確信が同時に述べられている。

聖人のこのような捨身滅罪の志向は、伊豆、龍口、佐渡と法難を経る中で明確に表われて来ている(四五九・五〇三・五〇七頁)。したがって佐渡に至って始めて明確な他界表象の浄土として示された靈山は、単に現在の苦難の代償として願案されたばかりでなく、過去の謗法を今生の受難によって消滅した後^レに得られる来世成仏の具體的な在り方として提示されたものと理解できる。

さて、『観心本尊抄』述作後、文永十年に書かれた『観心本尊鈔副狀』には「詣^二靈山浄土^一、^三拜見^二三仏顔貌^一」^二とみえ、『如説修行鈔』には「釈迦・多宝・十方の諸仏、靈山会上にして御契約なれば」(七七三頁)とあり、聖人の想定された靈山浄土が、三仏の列坐される法

華經虚空会の会坐であったことが窺える。またこの二書には、宿罪等に関する反省はみられず、「日蓮蒙^二仏敎^一、此土に生ける」(七三三頁)等と仏使としての使命感が強調されていることから、聖人にとつての靈山浄土は、如来の勅命による弘教を終えた後に帰りに行くべき本処としての宗教的意義のあったことが認められる。

聖人が佐渡配流の途上で書かれた『寺泊御書』には、「宝塔品、三箇勅宣令^レ被^レ靈山虚空大衆^一」(略)日蓮八十万億那由他諸菩薩、為^二代官^一申^レ之^一」(五一五頁)とみえ、『観心本尊抄』には、「其本尊、為^レ体本師、娑婆、上宝塔居^レ空^一」(七二二頁)、「如^レ是高貴大菩薩約^二足^一三仏^一受^二持^一之^一。末法、初^レ可^レ不^レ出^レ歎^一」(七一九頁)とみえるように、値難体験を通しての、自ら仏勅を奉じて仏の未来記を体現し、末法の衆生を救済せんとする「師」としての自覚の高まりと共に、法華經末法弘通の勸募・付属の儀式の展開された靈山虚空会の儀相は、聖人の念頭にいよいよ鮮明に描かれていったのである。

このことが捨身滅罪の決意や、現実的な生命の危機感と伴ない、聖人は自身命終の後、時空を越えて厳然と実在する法華經常住説法の会坐に自然に抱撰され(六〇四頁)、親しく教主釈尊の尊貌を拝し得ることを確信され

てゆかれ(七二一・七四二頁)、これを師弟共々の後生の安心として、いよいよ現世における忍難弘教・浄仏国土の実践に奮励されたものと推測される。

引用遺文は『昭和定本日蓮聖人遺文』により、()内はその頁数を示す。

教相 事 実

——「十如是考」に関することなど——

世 羅 治 夫

物や心に対する九つの視点、相・性などの九如是と、本末・究竟・等という暗号みたいな単語を束ねた一如是とによって構成される十如是卅四字は、偈でも呪でもなく、又、地文とも見えない。法華信者は朝夕の説経でこだけ特に三回読むから、その存在を知らぬ者はいない。ところが殆どの人がその意味が判らず、私もその一人だが、尤もらしい解釈を種々見聞するが要領を得ない。「謎の卅四字」と云った方が一番判り易いくらいである。

ある日、大智度論に諸法実相の解説として九事三如が語られてあるのを見てドキッとした。一年許り前のことである。九事と九如是が似ていることよりも、九事に前中後なき由と、下中上の三如がなんとなく本末究竟等に似ていたからだった。闇で何かがピカリとした感じがした。その時は、その頁へ若干のメモをしただけだったが、この七月、どうした弾みか、九事三如と十如是との共通点を考えたくなり、まとめたら「十如是考」になった。

十如是を十如と称すること自体理解し難いのだが、それをしも実相と呼び馴らしてあることは、どう考えても経の文脈に乗らないので卒直にメモし、直仰へ印刷したが、半信半疑のものを読者全員へ配るわけにゆかず、一部の人へだけ届けて批判を請うた。

それまでは止観と玄義しか見ていないので、「文句はきつと十如実相を否定してるだろう——」と期待したが、八月、日本から届けられた文句のコピイは十如実相の筋を弁証していた。或は、天台の遺弟の意案かもしれぬと思い、続いて「根性の融・不融」「十如是は実相か諸法か」「円頓章と十如是」などをまとめたが、十如是、諸法との信念は半信半疑から一挙に九信一疑くらいに高